校長通信（教職員版）第３５号　２０１８．４．９

高大接続改革を意識した先行実践事例

【１】はじめに

３月２８日、神戸三宮で１５時から１７時３０分までベネッセ主催の「新学年準備研究会―入試で勝つための各学年『年間計画』を考える」がありました。２月初旬ごろに申し込んでいたので、その当時は参加する意欲満々でしたが、さすがに年度末となると心身ともに疲労がたまり、朝から「行くの、やめようかな・・・」と逡巡していました。さらに、成績ミスのため、保護者への謝罪家庭訪問も予定に入り、益々参加意欲が低下していましたが、「とりあえず、行こう、内容が面白くなければ帰ろう」と思い、参加してきました。そのセミナーで学んだことを紹介しながら、本校での今年度の取り組みについて提案したいと思います。特に私の問題意識にあるのは、「クエスト後のキャリア教育は如何にあるべきか？」ということです。つまり、探究的な学習を進路実現に結びつける新たなキャリア教育の内容、そしてＡＬ手法を取り入れた新たなキャリア教育のスタイルです。

【２】福岡県立筑紫高校の取り組み

最初に紹介するのは、福岡県立筑紫高校です。

（１）筑紫高校はどんな学校？

筑紫高校は、１９７３年創立、１学年４００人の大規模普通科の高校です。進学実績は、２０１７年入試で東京芸大１名、九大3名、広島大１名、佐賀大３０名など１３５名が合格する大学です。地域のトップとはいえないまでも進学校には変わりはありません。

筑紫高校で問題になっていたのは、「校内模試の形骸化」です。私からすれば、「校内模試を作成できる力量がある教師がいるだけでもスゴイ！」と思いますが、校内模試と言っても実態は、「長期休み明けの課題テスト」という位置づけになっており、大学入試への対応、生徒の学力測定や教師の作問能力の向上に繋がるものになっていなかったということらしいです。

（２）高大接続改革への危機感

この筑紫高校が、指導の改善に力を入れ始めたのは、やはり「高大接続改革」「大学入試改革」があったからです。何に力を入れ始めたかは、

「高大接続システム改革を見据えた今後のキャリア教育の在り方～平成29年度からはじめるべきこと～」

のもと、「総合的な学習の時間」「HR 活動」「校内模試」の見直しに着手します。校内的には、「キャリア教育検討チーム」「アクティブ・ラーニング推進チーム」の2チームが立ち上げられます。

（３）改革の内容

①高校生活に向けた意欲を醸成するキャリア教育改革

筑紫高校が最も力を入れたのは、「総合的な学習の時間」のプラン作りです。重視された視点は、３年間の高校生活の土台となる進路観・学習観を低年次にしっかりと作ることです。つまり、「大学で何を学びたいのか」「学んだことを社会でどのように活かすのか」を１年生の早期に明確化することで、２・３年生に続く高校生活や大学入試へのモチベーションの向上を図りたいという思いです。

そして、そのコンセプトを主幹教諭兼進路部長の田中先生は次のように語っています。

> 単に受験を乗り切るための高校生活ではなく、どういう人生を送りたいのかということを深く考え、そのための土台を形成するための高校生活であってほしいと思います。そのためには１年生での土台作りが大切ですが、これまでは低年次から将来や社会とのつながりについて考えさせる機会は多くありませんでした。大学やその先の社会に対する興味・関心、社会貢献について具体的なイメージを持たせることで、将来への展望はもちろん、日々の学習に対する意欲や受験に対するモチベーションも高めていけると考えました。（田中先生）

この田中先生の問題意識は、全く私の問題意識と一致します。ずっと校長通信などで言い続けてきたことです。大阪で

仕事していると、とてもマイナー感を持つのですが、「他府県では同じ問題意識で改革している教師がいるのだ！」と心強く思います。そして、具体的に取り組まれたのが次の３点です。

★大学のアドミッションポリシーの研究

★APU の留学生との交流

★筑紫野市とタイアップした地域課題解決への挑戦（「Project　C」と呼ばれています）

１点目は、後で説明します。２点目、３点目から説明します。理由は、今布施高校でやっていること、これからやろうしていることを先行実施している例だからです。

２点目の APU との交流は次のような問題意識で始められました。

> ＡＰＵの留学生は、明確な課題意識をもって日本に来ています。日本で学んだ後、母国の課題解決に貢献したいというスケールの大きなビジョンを持っている学生が多い。一方、本校の生徒の中には、自分の夢を語れない者、夢とは呼べないような部活動レベルの目標を披露する者もいました。留学生の志に比べて、いかに自分の夢に具体性がないか、目的意識が希薄であるかを痛感した生徒も少なくなかったのではないでしょう（飯田先生）

この飯田先生の問題意識も、私の問題意識と全く同じです。74 期生から修学旅行の行き先を別府に変更し、APU との交流をメインに据えましたが、すでに先行実施している筑紫高校はその成果を感じ取っています。

具体的な取り組みは、以下のような内容です。

ア）生徒 10 人に対して留学生１人の小グループ

イ）「不思議の国　日本」というテーマで生徒はなぜ不思議だと思ったかを質問する。

ウ）その中で、母国との違い、高校時代の話、どんな将来像を描いているかを聞く

エ）最後に生徒が自分の将来や目標について英語で１分間スピーチを行う

ランチの後に

オ）留学生代表が自身の留学目的をプレゼンする。

カ）最後に異文化理解についてグループディスカッションをする

事前・事後指導ではワークシート（資料１・２）が用意されています。このワークシートもデータ化し、校長フォルダの筑紫高校資料に入れておきます。当然、生徒の評価ではルーブリック評価がされています。このルーブリック評価については、また別の機会で紹介しようと思います。「それ何？」という先生も多いのではないかと思います。

３点目の「Project　C」です。この「C」には、筑紫野市の頭文字、キャリア、コミュニケーション、クリティカル・シンキング、チャレンジなど様々な意味が込められています。この「Project　C」は、まさに昨年度から本校で取り組んでいるクエストエデュケーションの筑紫高校版です。そして、内容は今年の１年生で取り組もうとしている社会課題探究コース「ソーシャルチェンジ」部門と瓜二つです。

この取り組みは、筑紫野市の市役所とタイアップして、「観光」「地域コミュニティ」「福祉」「防犯・防災」「環境」の５分野のテーマで「課題設定⇒情報収集・整理分析⇒まとめ・表現」という流れで行われます。11 月いっぱいをかけてグループごとに調査・研究を進め、成果をまとめて 11 月末にポスターセッション形式で分野別発表会、12 月に全体発表会を行うというものです。やはり、このような「探究的学習が大切である」という問題意識は共通なのだと改めて思いました。

さて、大学のアドミッションポリシー研究の紹介です。

②改革その１ー大学のアドミッションポリシー研究

筑紫高校では入学したての４月に大学のアドミッションポリシー（以下、AP と称します）の研究を行います。私は、布施高校で１年生にＡＰ研究させるのは無理だと思います。これから紹介するのは、２年次で取り組むのが良いと思っています。以下紹介していきます。

まず、ＡＰ研究のねらいは、「大学や社会がどのような人材を求めているのかを知ることで、高校生活について考える第一歩にしてもらう」ということです。筑紫高校が対象にしたのは、地元の大学ではなくて、東大・阪大・愛媛大です。私は、この取り組みを布施で行うなら、近畿圏の大学として、大阪市大・大阪府立大・和歌山大・滋賀大・兵庫県立大などが国公立大としては候補になると思います。私立では、関関同立、産近甲龍が候補になるでしょう。そして必ず必要だと思うのは、地方の国公立大学です。よく私が例に出す徳島大学等を筆頭に幾つかの大学を入れるべきだと思います。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

ア）指定した大学のＡＰを読んで、ワークシート（資料３：デジタル化してフォルダに入れます）に取り組む。

イ）設問は、「ＡＰが描く人物像」「大学がこのＡＰを定めた理由」「共感できる箇所、印象に残った箇所」など。
ウ）授業では少人数グループで意見を共有
エ）グループ間でメンバー交代を行い、グループ同士の考えを共有したり、大学間の相違点を話したりする。
オ）最後にこれからの高校生活の抱負を記入。
クエストを経験した先生は、ある程度イメージができると思いますし、ウ）～エ）のやり方は、昨年度研修した「知識構成型ジグソー法」のスタイルです。
この取り組みについて飯田先生は次のようにコメントしています。

> 大学はどのような人材を求めているのか、社会においてどういう目的をもって活動しているのかを理解させることで、今から始まる高校３年間をどう過ごすべきか、イメージさせるのがねらいです。取り組みにあたっては事前学習の大切さを強調し、一人でも手を抜いたらほかのメンバーに迷惑がかかるのでしっかり取り組むよう伝えました。最初の進路学習ということもあって、どの生徒も真剣に取り組み、キャリア教育に前向きに取り組む意識を持たせることができたと思います」（飯田先生）

この大学の AP 研究は、１学期に取り組むのが良いと思います。時間数にして、２時間から３時間でしょうか・・・。進路の２年担当者に聞くと、６月にインテックス大阪で開催される「夢ナビライブ」にも連れて行きたいという構想があるようです。流れ的には、こんな感じはどうでしょう？

AP研究 ➡ 中間考査 ➡ 体育祭 ➡ 夢ナビライブ ➡ 夏休みオープンキャンパス参加

この流れだと、４月２６日に予定されている進路説明会をどうするかということを検討する必要があります。例年どおり行うか、AP 研究に切り替えるか、はたまた両方取り入れながら行うか・・・検討が要ります。体育祭を前後して、AP 研究というのもありかもしれません。夏休みには、必ずオープンキャンパスに参加させる必要があります。実際に数校参加することで、自分が進学したいと思う大学を検討させることで、３年次の科目選択を考えさせなければならないと思います。ですから、このオープンキャンパス参加の課題もこれまでのようにレポートを課すだけではなく、ＡＬ的手法を取り入れ、同じ方向を考えている生徒同士、情報交換を行うグループワークを行うなどのスタイルを検討してほしいと思います。例えば、文系・理系という大雑把なわけ方ではなく、工学系、農学系、薬学系、教育系、経済・経営系、看護系、などなどでグループワークをするのがよいのではないかと思います。必要ならば２～３クラスでクラスを解体するスタイルもあるでしょう。
さて、２年生は、創造祭が終れば「修学旅行の準備⇒２学期中間考査⇒修学旅行」と目まぐるしく、スケジュールが過密です。１１月には３年科目選択の提出が待っています。私は、この科目選択にあわせて「行きたい大学＝第一志望」を決めさせるのが良いと思います。そして、問題なのはこの後です。この第一志望を単に決めただけではなくて、その大学に行くための気持ちを固めさせなくてはなりません。そのための取り組みをすでに行っている高校を紹介しましょう。

【３】長崎県立諫早高校の取り組み

長崎県の諫早高校は、共学の普通科の高校、国公立大学２２７名（２０１４年実績）の進学校です。東工大２名、京大５名、阪大１名、神大２名、九大１９名の輝かしい実績ですが、この諫早高校も悩みがあり、市内のトップレベルの生徒が長崎市内の高校に流出するというのです。
さて、諫早高校の取り組みで力を入れているのが、「ＣＡＤ学習」です。C＝Comprehension（理解）、A＝Ambition（志）、D＝Discovery（発見）のそれぞれの頭文字で CAD 学習です。大学入試に向けて早期からモチベーションを高めるというのが、目的です。その中で２年次後半にこの CAD 学習の集大成として取り組んでいるのが、“志望理由書”の作成です。それでは、その取り組みを紹介しましょう。

＝“志望理由書”作成の取り組み＝
ア）生徒は、先輩の志望理由書を読む。
イ）先輩の志の高さを感じながら、「自分にしか書けない」内容を熟考する。
ウ）調べる必要があることをワークシート（資料４：デジタル化してフォルダに入れます）に記入する。
エ）志望理由書（資料５：デジタル化してフォルダに入れます）は担任から下書きの点検を受ける。

オ）清書した後に３年次の担任に提出する。
カ）３年次の新しい担任とは、その志望理由書をもとに面談を行う。

如何でしょう？７０期生・７１期生の後輩へのアドバイスアンケート結果でも、第一志望決定の遅さ、本気で取り組む時期の遅さを後悔する生徒が多数を占めます。諫早高校は、この志望理由書作成の取り組みを２年生の３学期に行っていますが、私は２年生の修学旅行直後から科目選択の提出と連携させながら行うのが良いと思います。№.４と№.５のワークシートの改良も必要だと思います。
以上の流れを図式化すると、以下のようになるのではないかと思います。

夏休みオープンキャンパス参加 ➡ 創造祭 ➡ 修学旅行 ➡ 志望理由書の作成のための調査 ➡ 科目選択の提出 ➡ 志望理由書の作成 ➡ ３年新担任と面談

【４】三者面談へのＡＬ手法の導入

職員会議でも少し紹介しましたが、三者面談で生徒にプレゼンテーションを行わせる高校が、増えているようです。高槻中学校・高等学校の取り組みの紹介を以前にしましたが、その取り組みを参考に岩手県盛岡第三高校でも同様の取り組みが行われています。
盛岡第三高校では、定期考査ごとに「振り返りプレゼン」を行わせています。生徒が「ワークシート」に自身の学習の進め方や反省点、どう変えていくと良いかなどを記入し、三者面談の際にプレゼンを行わせています。
本校での三者面談はどのような様子なのでしょう？面談現場は知らないのでなんとも言えませんが、私が担任していた頃の三者面談を思い出すと、三者面談で始めて生徒に考えるべき課題を提示し、その場で「これからどうするの？」と生徒に考えさせ、生徒は「担任や保護者の手前、理解し納得した振りをする」ということが多かったように思います。これでは、長い時間をかけて先生方の時間も拘束される三者面談の効果が半減以下です。
それを改善するために、事前にワークシートを用意し、それに基づいて事前に考えさせておく、そしてその内容を担任と保護者に説明させ、三者の合意を得るというスタイルが良いと思います。面談の課題としては、今まで紹介してきたキャリア教育の内容もあると思いますが、それ以外にも
①定期考査の成績・模試結果　②学校生活　③日々の勉強や学校生活の悩み
等、その時々に必要な内容のワークシートを学年で用意できれば良いのではないかと思います。

以上、３月２８日に実施されたセミナーの報告を終えたいと思います。

【５】最後に

入学式の式辞で紹介した本を紹介します。この本は、２０１８年2月１５日に第１版が発行されてから、３月２７日には第６版が発行されています。つまり、爆発的に売れているわけです。今、中高の教師にとっては、この本は必読書ではないかと思います。
紹介しながらこんなことを言うのはなんですが、私はまだ最後まで読みきっていません。しかし、かなり引き込まれる内容です。本の帯には、

ＡＩが神になる？
・・・・なりません！
ＡＩが人類を滅ぼす？
・・・・滅ぼしません！
シンギュラリティが到来する？
・・・・到来しません！

と、巷で噂されているＡＩに関する偏見を、新井教授は自らの「東ロボくん」の開発経験を通じて具体的に批判しています。

後半には、中高生の読解力の危機感からＡＬへの批判まで飛び出しています。おそらく、近々、ＡＬの推進派の学者から反論が出るでしょうね。それを読むのもまた楽しみです。先生方もこの本は読んだほうが良いと思いますよ。